

Readers Theatre が日本の英語教育を救う可能性

浅野享三 (南山大学)

日本の英語教育は混迷しているという。いわゆる大学全入化が到来し、かつて経験したことのない低学力の学生が入学し、リメディアル教育の必要が叫ばれて久しい。一方で、長引く日本経済の低迷を背景にしたようにグローバル人材育成が課題とされる。文科省、厚労省、経済界などの要請や期待が高まる。英語教育関係者は、コミュニケーション重視の授業を余儀なくされ、英語が読めるだけでなく、聞けて話せるような生徒や学生を育てることが、より一層求められるようになった。結果が出ないことに業を煮やしたかのように、小学校外国語活動という英語教育が始まり、高校卒業資格には TOEFL スコアを求めるなどという動きすらある。まさに混迷の象徴という感じがする。

筆者は、長年英語教育に従事するうちに、中学、高校、短大で生徒・学生を指導する機会に恵まれた。自身の中学生の頃から振り返れば、文法訳読授業に始まり、パタンプラクティスを中心にオーディオリンガルメソッド、コミュニケーションアプローチなど各種授業方法を経験した。そして、常に上級学校への進学準備が求められ、受験問題対策授業も真剣に向き合ってきた。手塩にかけた生徒が、希望する進学を果たしたときは、無常の喜びと安堵感があった。この仕事のやりがいを感じさせられた。

しかし、短大で受験対策がなくなり、偏差値向上を理由にした授業が出来なくなり、英語教育だと信じて取り組んできた授業や指導は、ある意味で用をなさなくなった。学生は英語が話せるようになりたいという。分かる。カッコいいから。外人のように話したい。発音がきれいになりたい。全部分かるので、その英語で何を話したいのかを聞くと、学生の多くは沈黙する。英語を学ぶ目的は何かという筆者の問いに、受験以外は真面目に考えたことはないと言う。多くの時間と労力を費やす作業を継続してきたはずなのに、何か気の毒な気がする。英語教育関係者として、学生の期待に応える新たな責任があると痛感する。

本発表は、現在短大生を対象に研究と実践をしている英語の Readers Theatre の取り組みについて、その実態を紹介し、英語教育を救う可能性に言及し、学生の期待に応えうる必要で有用な方法であることをビデオクリップも用いて伝えるものである。また、学生による実演を挿入する。